

第1章 計画の概要

1. 計画の作成

- (1) 作成年月 令和4（2022）年3月
- (2) 作成者 高岡市市長政策部都市経営課
- (3) 計画期間

令和4年4月1日から耐震補強・文化財保存修理事業完了までの期間とし、完了後は計画を見直すものとする。また、事業の進捗及び関係法令や社会情勢の変化等を踏まえ、必要に応じて見直すこともある。

2. 対象施設の名称等

- (1) 名称及び員数
旧高岡共立銀行 1棟
高岡市山町筋伝統的建造物群保存地区内
- (2) 所在地 富山県高岡市守山町 20 番1
- (3) 所有者の氏名及び住所
ア 所有者 高岡市
イ 所有者の住所 富山県高岡市広小路7番 50 号
- (4) 施設の構成
ア 伝統的建造物の構成
北棟（建築物）：大正3（1914）年竣工
南棟（建築物）：大正 15（1926）年竣工
煉瓦塀（工作物）：大正3（1914）年竣工
イ 伝統的建造物特定年月日
平成 12（2000）年7月7日
ウ 一体となって価値を形成する物件
敷地面積 計 1,947.25 m²
高岡市守山町 20 番地1（1,060.90 m²）
高岡市一番町6番1（886.35 m²）
- (5) 伝統的建造物の構造及び形式
北棟：鉄骨煉瓦造
地下1階、地上2階建
銅板葺・瓦棒葺
建築面積 361.98 m²
延床面積 505.55 m²
金庫室地階 14.9 m²
〔いずれも CAD 求積による〕
南棟：鉄筋コンクリート造
地上3階建

陸屋根

建築面積 256.01 m²

延床面積 830.57 m²

〔いずれも CAD 求積による〕

煉瓦塀：煉瓦造

長さ約 15 m、高さ約 3.8 m

3. 対象施設の概要

(1) 立地環境

高岡市は富山県北西部に位置し、富山市に次ぐ県内第2の都市で、人口約 166 千人、市域面積は 209.57km²である（図 1-01）。

旧高岡共立銀行が所在する「山町筋伝統的建造物群保存地区」（平成 12（2000）年 12 月 4 日重要伝統的建造物群保存地区に選定）（図 1-02）は、高岡駅から北西約 800 m にあり、面積約 5.5ha〔守山町、小馬出町の各全域及び御馬出町、木舟町、一番町、三番町、源平町及び元町の各一部〕、伝統的建造物（建築物）97 棟、伝統的建造物（工作物）12 件より構成される（令和4（2022）年2月末現在）。保存地区内



図 1-01 高岡市の位置

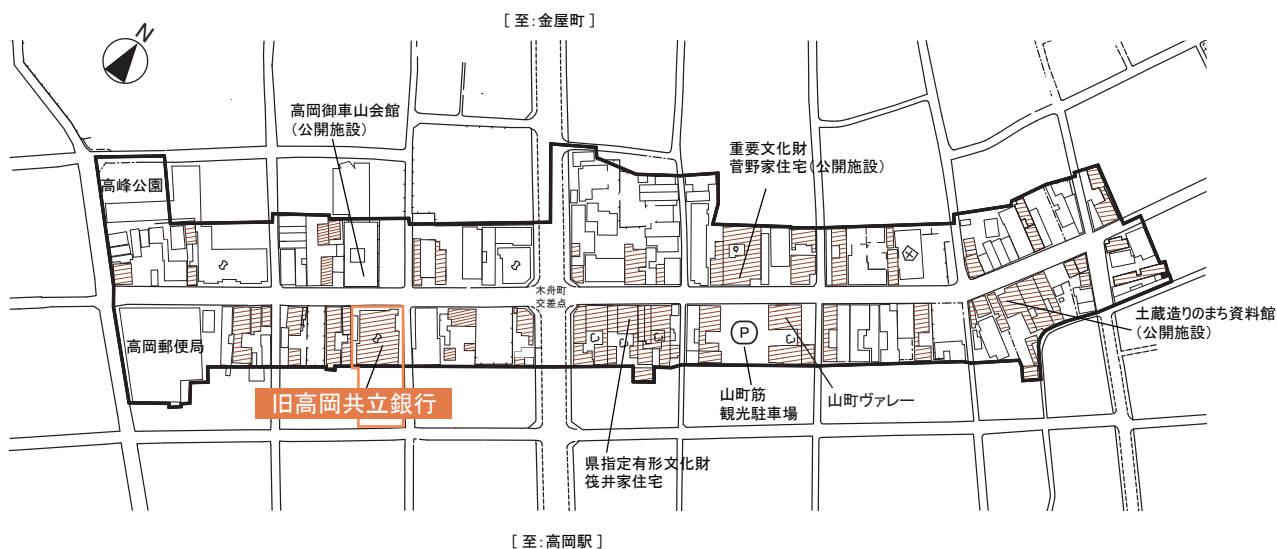


図 1-02 山町筋伝統的建造物群保存地区の範囲及び旧高岡共立銀行の位置

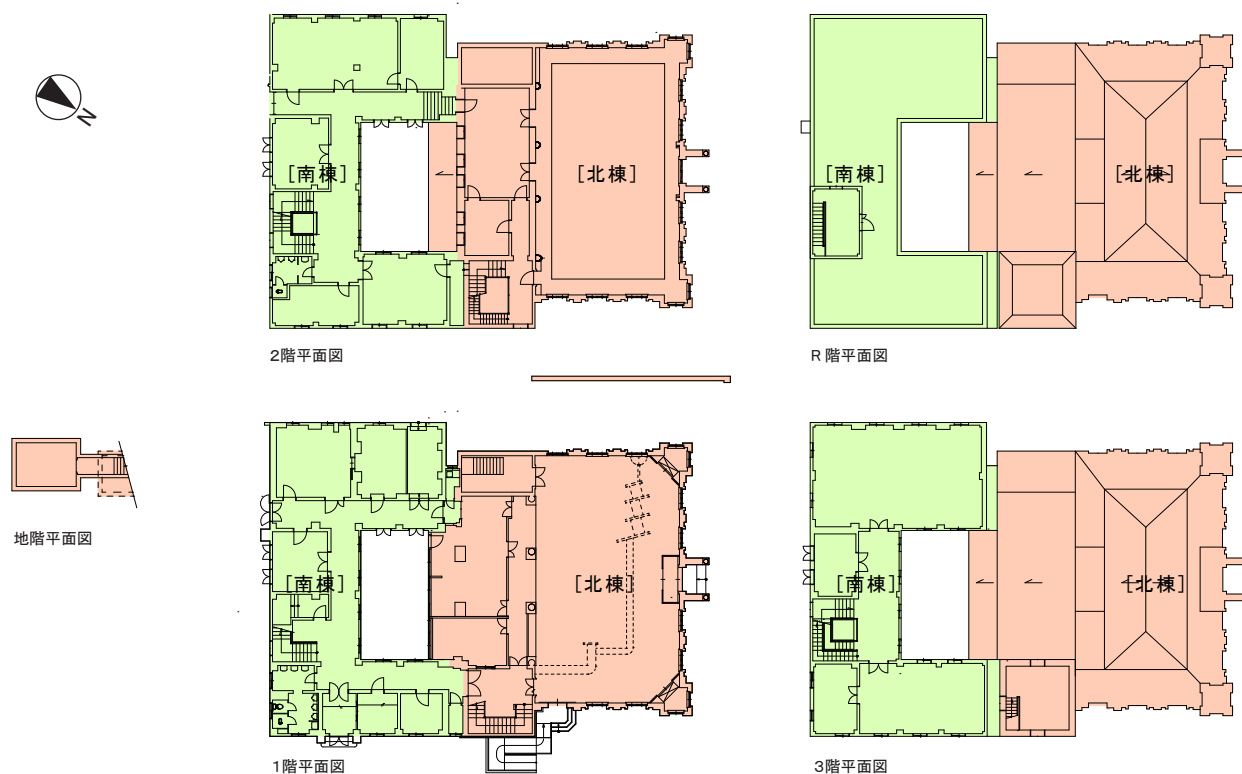


図 1-03 旧高岡共立銀行平面図 北棟及び煉瓦塀（橙）と南棟（緑）の区分

には、廻船問屋として富を築いた高岡有数の商家である重要文化財菅野家住宅（木舟町）（写真 1-01）、綿糸の卸商家である富山県指定有形文化財篠井家住宅（木舟町）をはじめ、明治中期から昭和初期に建てられた町家が残る。重要伝統的建造物群保存地区に選定されて以降は、町並み保存と併せた新たな出店もあり、近年は元文具商

「谷道家」をリノベーションした商業施設「山町ヴァレー」（写真 1-02）や西織（ニッセン）ビル内の「ニッセン・アート・スタジオ」などの取り組みもみられる。

周辺には、鋳物師を招き集住させたことに始まる「金屋町伝統的建造物群保存地区」（平成 24（2012）年 12 月 28 日選定）（写真 1-03）、国宝瑞龍寺、国史跡高岡城跡（高岡古城公園）等が

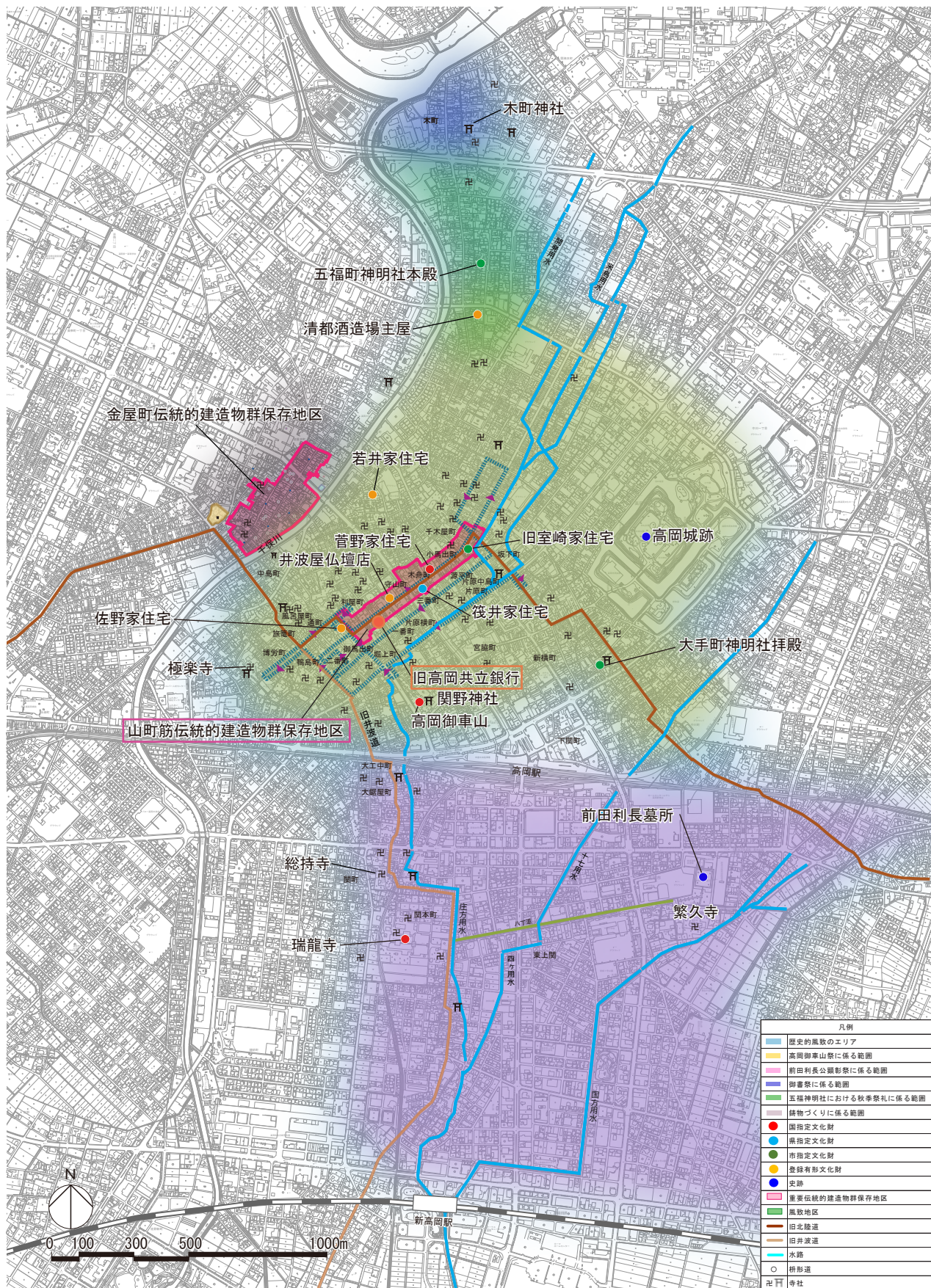


図 1-04 山町筋伝統的建造物群保存地区周辺の文化財（高岡市歴史的風致維持向上計画（第2期）82 頁 /91 頁図に加筆）



写真 1-01 国指定重要文化財 菅野家住宅
(山町筋伝統的建造物群保存地区)



写真 1-02 山町ヴァレー
(山町筋伝統的建造物群保存地区)



写真 1-03 金屋町伝統的建造物群保存地区



写真 1-04 万葉線高岡軌道線

あり（図 1-04）、高岡駅から万葉線（写真 1-04）で北東部に向かうと、加賀藩の御蔵が置かれ、明治以降は米穀売買・倉庫業で栄えた「吉久伝統的建造物群保存地区」（令和2（2020）年12月23日選定）も含め、市内には数多くの文化財が点在する。

(2) 歴史的環境

現在の高岡のまちが形成された原点は、慶長14（1609）年、加賀前田家2代当主・前田利長が開いた城下町である。この地は当時関野ヶ原と呼ばれていた台地で、上段に高岡城と武家屋敷が築かれ、西側下段に約75m四方の基盤割の町人地が形成された。慶長19（1614）年に利長が死去したことにより、家臣及び武家集団は金沢に引き揚げ、翌年の江戸幕府による一国一城令で高岡城は廃城となった。

3代当主・利常は衰退していく町を立て直すため、町人の転出を禁じ、諸施策を講じて高岡を商工業の町に転換させた。明暦3（1657）年には魚問屋、塩問屋が創設され、城跡に御詰米と御詰

塩の御蔵が置かれた。利常没後もその政策は受け継がれ、寛文年間（1661-1672）には御蔵が吉久や立野などにも置かれ、米場が形成された。また、寛文11（1671）年に締綿（精製綿）市場が開かれ、加賀・能登・越中の綿商人が高岡に集中したことも経済の発展に大きく寄与した。

明治期になり自由な商業活動が可能になると、高岡米商会所、綿取引を行う寛文社、肥料を扱う豊饒社が開業し、経済はますます活性化する。このように近世から近代にかけて、物資集散の拠点として発展をみせた高岡において、商業活動の中心を担ったのが、旧北陸道沿いの十か町よりなる山町である。

また、高岡は北陸地方の他都市と同じく、フェーン現象の影響などから度々大火に見舞われてきた。なかでも、明治12（1879）年3月には2000戸、明治33（1900）年6月には3589戸を焼いた大火を経験し、都市の不燃化は喫緊の課題であった。山町筋では明治33年の大火からの復興にあたり、その前年の明治32（1899）年に施行された「建

物制限規則」（富山県令第51号）によって、繁華街での新築は耐火構造とすることが義務付けられたため、土蔵造りをはじめ耐火建築への建替えが進められた。

なお、山町は「御車山（みくるまやま）」を所有・継承することから、そのように呼ばれており、毎年5月1日に「高岡御車山祭」が開催され、絢爛豪華に飾られた御車山が曳き回される。「高岡御車山」は重要有形民俗文化財（昭和35（1960）年6月9日指定）に、「高岡御車山祭の御車山行事」は重要無形民俗文化財（昭和54（1979）年2月3日指定）に指定されており、また「高岡御車山祭の御車山行事」は、平成28（2016）年にユネスコ無形文化遺産の「山・鉾・屋台行事」の一つにも登録された。

（3）施設の沿革

明治22（1889）年、市制施行と同時に高岡銀行を組織したのは、高岡市内の有力者である。当時、政府は国立銀行を整理し普通銀行の育成に転じ、明治26（1893）年に銀行条例を制定、また国立銀行の営業期間満了に伴う普通銀行への変更もあり、全国的に普通銀行が増大していた。

一方、高岡共立銀行は、高岡銀行の経営陣に対抗し、市外実力者も迎え入れ財界有力者らによって設立された銀行で、明治28（1895）年8月に出願、10月に免許を取得し、12月の創立総会を経て正式に開業を認可された。発起人は木津太郎平、高広次平、志摩長平、島田七郎右衛門、広岡庄二、菅池貞次郎、国本弥吉、金森次平、橋清治郎、盤若覚兵衛、戸沢藤八、米萩与平の13名で、初代頭取は海運業者で中央経済界にも通じていた馬場道久が務めた。二代頭取は木津太郎平、三代頭取は高広次平が務め、この間に銀行として確固たる地位を築いていく。明治28（1895）年の設立時、本店庁舎は守山町の民家を買収して使用していた（写真1-05）。当時は普通銀行で銀行券（貨幣）を発行する権限はなく、江戸以来の質屋や高利貸と同じような利用形態で、店構えも帳場格子質屋と同様のものであった。この頃の店構えは、北陸中央新聞社が明治33（1900）年正月の附録で発行した『高岡繁昌双六』の挿絵からも窺い知ることができる。

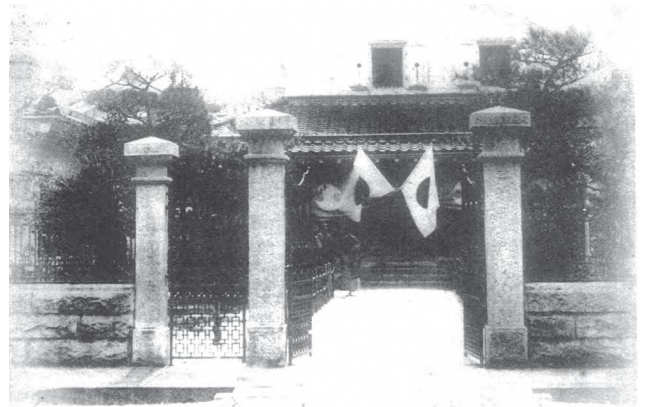


写真 1-05 大正3年以前の旧高岡共立銀行本店行舎
（「高岡共立銀行有終史」（昭和3年）口絵より）

大正2（1913）年、近代的な銀行として生まれ変わるべく本格的洋風建築への全面改築が着手され、翌3（1914）年に完成した建物が現在の北棟である。設計を担当したのは、当時、清水満之助店（現清水建設）技術部の技師長であった田辺淳吉（1879-1926）である。

田辺は、東京帝国大学工科大学建築学科において、我が国における最初の建築家であり「日本近代建築の父」とも称される辰野金吾（1854-1919）に、佐野利器や佐藤功一らとともに学び、明治36（1903）年の卒業と同時に清水満之助店に入店した。翌年2月から明治38（1905）年12月まで京都に赴任し、第一銀行京都支店（現みずほ銀行京都中央支店）の新築現場で、設計者であった辰野の補佐を務めた。学生時代より、その芸術的才能が評価されていた田辺は、清水組技師時代には、大阪瓦斯本社（大阪府大阪市、明治38（1905）年竣工、現存せず）、東海銀行本店（東京都中央区、明治42（1909）年竣工、現存せず）など幾つかの銀行建築や事務所等の設計を手掛けたほか、渋沢倉庫（東京都中央区、明治42（1909）年竣工、現存せず）では我が国最初の鉄筋コンクリート造建築を実現するなど、最先端技術の導入にも積極的であったことが知られる。

なお、北棟の建設当時、地元の建築業界や経済界は相談を受けなかったことに反発し、建築資材の提供を拒否したとされ、足場丸太の一本に至るまで名古屋など遠方から運び込まれた記録が残されている。

高岡共立銀行は第一次世界大戦（1914-1918）

による好景気の影響もあり、大正9（1920）年には高岡銀行との合併を実現し、新たな高岡銀行となった後には、大正12（1923）年の関東大震災による不況、昭和2（1927）年の金融恐慌など相次ぐ危機を乗り越え、数々の銀行を吸収・合併しながら拡大し、高岡を中心に北陸金融業界の重責を果たしていくことになる。

大正15（1926）年、当時の合資会社清水組（現清水建設）技術部の大友弘（1888-1963）の設計によって南棟が増築されたのは、このような拡大の時期にあたる。大友は明治37（1904）年、15歳で店童として清水満之助店に入店した（写真1-06）。大正2（1913）年、田辺は技術部の五代技師長となり、北棟の設計を行うが、この翌年の大友の作品に川崎銀行佐原支店（現佐原三菱館）があり（写真1-07）、両者の明らかな影響関係が見てとれる。どちらも「辰野式」と呼ばれる特徴的な赤煉瓦の外観意匠が目目を惹くが、その構造や材料、工法に目を転じると、鉄骨補強や鉄筋コンクリート等、当時最先端の近代技術を導入して、耐火性、耐震性の向上が目指されたことは、特筆に値する。

この後は、昭和16（1941）年の太平洋戦争開戦に伴い、金融機構の再編が進んでいく。昭和17（1942）年には「金融事業整備令」（勅令第511号）が施行され、普通銀行の1県1行化の結果として、高岡銀行は昭和18（1943）年に十二

銀行、中越銀行、地銀の富山銀行（現在の富山銀行ではない）と合併統合し、北陸銀行が設立された。昭和20（1945）年以降は、戦後復興によるインフレーションや高度成長期の活況を背景に、北棟及び南棟は北陸銀行高岡支店として使用されていく。

昭和39（1964）年、北陸銀行高岡支店と御馬出支店が統合して片原町に移転し、これと同時に富山産業銀行が建物を取得し、増改築して、本店として使用し始める。当時の富山産業銀行は従業員数251名、検査部・総務部・業務部・審査部の4部からなり、昭和42（1967）年には富山銀行と行名を変更した。

以後、富山銀行は組織再編を繰り返しながら拡張し、平成12（2000）年には従業員数が520名となったことから、南側に新館（令和2（2000）年解体撤去）を増築し、機能の充実を図った。さらに令和元（2019）年には高岡駅前に新社屋を建設し、同年11月25日に本店を移転の後、令和3（2021）年に建物は高岡市に譲渡された（図1-05）。



写真 1-06 清水店技術部スタッフ 大正4年頃
前2列目右から3人目が田辺、前列右から4人目が大友（松波秀子「明治・大正期の建築作品集にみる清水組設計組織 その2」より）



写真 1-07 川崎銀行佐原支店（現佐原三菱館）
大友弘設計 大正3（1914）年竣工

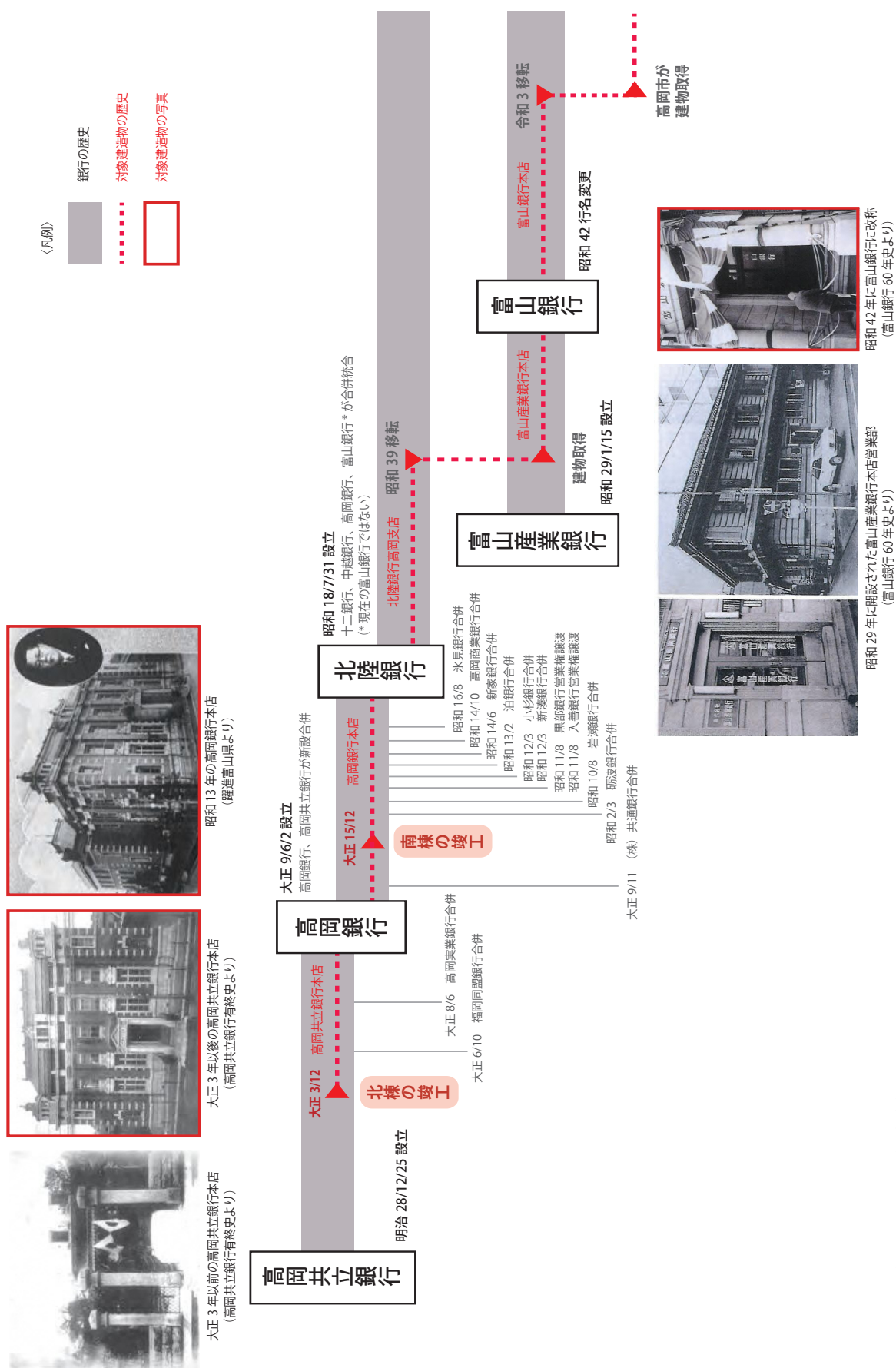


図 1-05 関連する銀行と対象建造物の歴史

明治期の経済政策と銀行の誕生

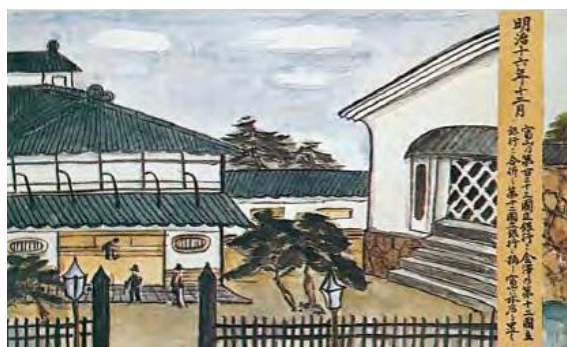
明治元（1868）年、新政府は通貨供給政策の一環として、商業の振興と収税・勸業を担当する商法司を設置し、翌2（1869）年には外国貿易事務を担当させるため、通商司を諸開港場に置いた。さらに商社を統括して全国の商品流通機構を再編制し、諸藩の物流と外国貿易の把握を任務とする通商会社、及びこれを中心とした為替会社を設置した。しかしながら、思うような成果が上がらず、商法司は明治2（1869）年に、通商司は明治4（1871）年に廃止される。経済政策の草創期において、全国的な金融基盤の形成を期待された商法司・通商司は、このように未成熟で短命ではあったが、このとき設立された為替会社が、従来の両替商に代わって近代的な銀行の先駆けとなっていく。

一方、明治元（1868）年に日本初の全国通用紙幣となる太政官札が発行され、さらに明治4（1871）年の廃藩置県、続く地租改正、華族・士族の秩禄処分により、全国の行政機関を中央政府のもとに再編するための収税及び通貨政策が求められた。これに関連して、国立銀行を設立し、運営の仕組みを整えるため、同年5月に新貨幣条例が制定される。翌5（1872）年には渋沢栄一らが中心となり国立銀行条例を公布し、各府県における国立銀行の設立を推進したが、開業は4行にとどまったことから、明治9（1876）年に条例を改正し、銀行設立に係る条件などを緩和した。

この条例改正を機に、全国的に国立銀行設立の機運が高まったものの、インフレーションの激化や外国の銀相場下落によって国内の金貨が流出したことで、健全な通貨制度への道のりは大きく後退した。明治14（1881）年に松方正義が大蔵卿に就任すると、翌15（1882）年10月には金利を低減し産業振興を図り、時を同じくして、全国の国立・普通銀行を指導するための中央銀行として日本銀行が誕生した。日清戦争（1894-1895）の勝利が国勢の発展に拍車をかけると、さらに産業界は空前の活況を呈し、これに歩調を合わせるように全国各地に大小の銀行が誕生していった。

この時期の北陸地域における主な銀行としては、明治10（1877）年に開業した金沢第十二国立銀行、同12（1879）年に開業した富山第二百二十三銀行などがある。両行は明治17（1884）年に合併して富山第十二国立銀行と改称し、土蔵造の本店を富山に置いた。

高岡共立銀行が守山町を拠点とした当時、同じ街道沿いには、第十二国立銀行高岡支店（明治16年開設）をはじめ、第二百二十三国立銀行、中越銀行、氷見銀行支店、地銀としての高岡銀行（明治22年開設）、高岡貯蓄銀行（明治28年開設）などが軒を連ねていた。



富山第二百二十三銀行本店と土蔵
（北陸銀行富山金融歴史資料館）



高岡貯蓄銀行（高岡市史下巻 p.531）

(4) 主な改造時期とその内容

現段階で推定される対象施設の主な改造履歴とその内容は、以下の通りである。

■大正 3 (1914) 年 12 月 〈表 1-02 : 図面①〉

【北棟】鉄骨煉瓦造 2 階建として竣工
(清水建設所蔵図面)

■大正 7 (1918) 年 5 月以降

【北棟】屋根庇修理工事
(同年 1 月 7 日の記録的大雪被害を受けて)
北棟屋根葺替 (天然スレート葺から銅板葺へ)
(清水建設所蔵図面)

■大正 15 (1926) 年 12 月 〈表 1-02 : 図面②〉

【南棟】RC 造 3 階建事務所棟を増築
(清水建設所蔵図面)

■昭和 13 (1938) 年 5 月 〈表 1-02 : 図面③〉

【北棟・南棟】衛生設備の更新 (表 1-03)
南棟に地階を増築
北棟の金庫室から地階へ入室する経路を増設
(清水建設所蔵図面)

■昭和 19 (1944) 年 3 月 31 日

(建物登記簿記載) ※下線部は記述の誤り
所有権保存 株式会社北陸銀行
一 鉄筋コンクリート造銅板葺 2 階建物事務所 1 棟
附属 一 鉄筋コンクリート造瓦葺 3 階建物事務所 1 棟
附属 一 木造瓦葺平屋建居宅 1 棟
附属 一 土蔵造瓦葺 2 階建倉庫 1 棟

■昭和 22 (1947) 年 9 月 9 日 〈表 1-02 : 図面④〉

【附属】木造瓦葺平屋建居宅を 2 階建に改築
木造瓦葺平屋建物置を新築
(建物登記簿記載)

増築有り建物表示変更

一 鉄筋コンクリート造銅板葺 2 階建物事務所 1 棟
附属 一 鉄筋コンクリート造 3 階建物事務所 1 棟
附属 一 土蔵造瓦葺 2 階建倉庫 1 棟
附属 一 木造瓦葺 2 階建居宅 1 棟
附属 一 木造瓦葺平屋建物置 1 棟

■昭和 39 (1964) 年 10 月 〈表 1-02 : 図面⑤〉
北陸銀行高岡支店から富山産業銀行 (後の富山銀行) 本店への所有権移転に伴う改修
(建物登記簿記載)

昭和 39 年 10 月 9 日 登記名義人表示変更
原因 : 昭和 34 年 11 月 24 日本店移転、
昭和 36 年 11 月 13 日本店移転
昭和 39 年 10 月 12 日 所有権移転
株式会社富山産業銀行

【北棟・南棟】内装改修
北棟の階段手摺、南棟の会議室内装改修もこのときか

■昭和 40 (1965) 年

【附属】車庫棟 (RC 造) 増築
(固定資産税課税明細書)

■昭和 40 年代か

【北棟】営業室天井高さ改変か
営業室天井シャンデリア照明器具 2 灯設置か
(根拠 : 安定器の製造年 昭和 41 年)
営業室天井水銀灯照明 8 灯設置か
(安定器の製造年・昭和 43 年)

■昭和 52 (1977) 年

【附属】中庭車庫 (CB 造)、ATM 棟 (RC 造) 増築
(固定資産税課税明細書)

■平成 10 (1988) 年 〈表 1-02 : 図面⑥〉

【北棟】営業室内装改修
図 1-06 参照

【附属】ATM 棟増築改修
(富山銀行所蔵資料)

■平成 22 (2010) 年 8 月

【北棟】銅板屋根修理工事
(高岡市町並み保存の記録 10)

■令和 2 (2020) 年 7 ~ 12 月

【附属】解体撤去工事着手~完了

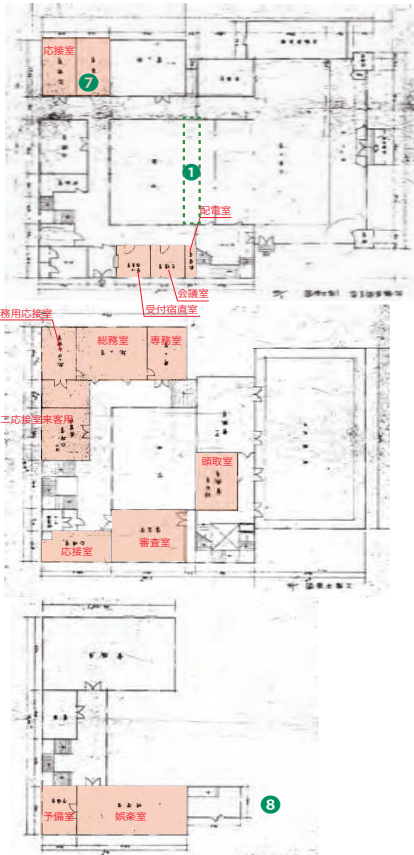
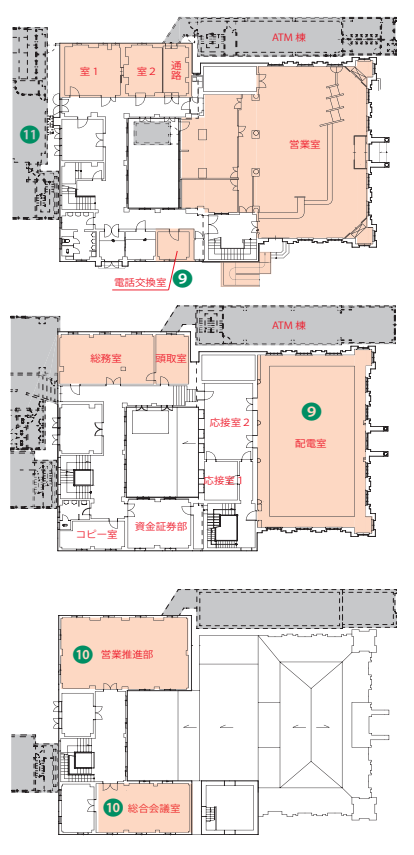
表 1-01 旧高岡共立銀行関連年表

西暦	和暦	月 日	事 項	典 拠	写真	図面
1913	大正2年	7月	田辺淳吉が清水満之助店設計部の第5代技師長となる	松波論文		
		9月6日	高岡共立銀行と清水満之助店が工事請負契約を締結	高岡共立銀行有終史		
		9月7日	【北棟】起工	清水組竣工報告書		☆
1914	大正3年	?	【北棟】上棟式	清水建設所蔵資料	★	
		12月25日	【北棟】竣工	清水組竣工報告書	★	☆
		12月27日	【北棟】二十七八の両日、一般公衆の縦覧	富山日報1914/12/26		
		12月28日	【北棟】夜、新築行舎に仮移転	富山日報1914/12/26		
1915	大正4年	1月4日	【北棟】本店新行舎落成（落成に付き移転）	高岡共立銀行有終史		
		1月5日	【北棟】午後四時より落成宴を開催	高岡新報1915/1/6など		
1916	大正5年	2月15日	創業二十年式	高岡共立銀行有終史	★	
1917	大正6年	9月25日	福岡同盟銀行を合併	北陸銀行「創業百年史」		
1918	大正7年	1月7日	大雪（最深積雪148cm）	気象庁HP		
		5月以降	【北棟】屋根庇修繕工事	清水建設所蔵資料		☆
		7月6日	渋沢（栄一）男爵来訪（行員に対し一場の訓話あり）	高岡共立銀行有終史		
1919	大正8年	6月30日	高岡実業銀行を合併	北陸銀行「創業百年史」		
1920	大正9年	6月21日	高岡共立銀行と高岡銀行の合併により、高岡銀行を新立 【北棟】高岡銀行本店として開業	北陸銀行「創業百年史」	★	
		11月	共通銀行を合併	北陸銀行「創業百年史」		
1926	大正15年	12月	【南棟】事務所（RC造）を増築（木造附属家、煙突は解体）	清水建設所蔵資料		☆
1927	昭和2年	3月1日	砺波銀行を合併	北陸銀行「創業百年史」		
		7月30日	『北陸タイムス20年記念』刊行（高岡銀行増築部の外観写真）	富山県立図書館所蔵	★	
1935	昭和10年	8月10日	岩瀬銀行を合併	北陸銀行「創業百年史」		
1936	昭和11年	8月10日	黒部銀行及び入善銀行を買収	北陸銀行「創業百年史」		
1937	昭和12年	3月31日	小杉銀行及び新湊銀行を合併	北陸銀行「創業百年史」		
1938	昭和13年	2月6日	泊銀行を買収	北陸銀行「創業百年史」		
		5月	【南棟】衛生設備工事	清水建設所蔵資料		☆
		8月10日	『躍進富山縣』刊行（高岡銀行増築部の外観写真）	NDL文献	★	
1939	昭和14年	6月30日	新家銀行を買収	北陸銀行「創業百年史」		
		10月31日	高岡商業銀行を買収	北陸銀行「創業百年史」		
1941	昭和16年	8月17日	氷見銀行を買収(株式買収)	北陸銀行「創業百年史」		
1943	昭和18年	7月31日	十二銀行、高岡銀行、中越銀行、富山銀行（現在の富山銀行ではない）の 4行合併により北陸銀行を設立 【北棟・南棟】北陸銀行高岡支店として開業	北陸銀行「創業百年史」		
		12月20日	金沢貯蓄銀行及び富山合同貯蓄銀行を合併	北陸銀行「創業百年史」		
1944	昭和19年	12月1日	北陸信託株式会社を合併	北陸銀行「創業百年史」		
1947	昭和22年	9月	【附属】木造附属家を改築（2階建となる）	建物登記簿		
		?	【附属】本館西側および南側に車庫を増築	富山銀行保管図面		☆
		?	【附属】自転車置場を新設			
1959	昭和34年	?	『富山県の観光と産業』刊行（北陸銀行高岡支店の外観写真）	高岡市中央図書館蔵	★	
1964	昭和39年	9月30日	建物と土地が富山産業銀行の所有となる	建物登記簿		

西暦	和暦	月 日	事 項	典 拠	写真	図面
		10月	【北棟・南棟】内装改修	富山銀行60年史		
		11月4日	【北棟・南棟】富山産業銀行本店として開業	富山銀行60年史		
1965	昭和40年	?	【附属】車庫棟（RC造）増築（木造附属家、土蔵は解体）	富山銀行保管図面、固定資産税課税明細書		☆
		?	【南棟】車庫棟との接続			
	昭和41年頃	?	【北棟】営業室天井シャンデリア照明器具2灯設置か	安定器の製造年		
1967	昭和42年	8月1日	富山産業銀行が富山銀行に行名を改称、建物は富山銀行本店となる	富山銀行60年史	★	
	昭和43年頃	?	【北棟】営業室天井水銀灯照明8灯設置か	安定器の製造年		
1970	昭和45年	4月	《組織編成》事務部ができる	富山銀行60年史		
1971	昭和46年	4月	《組織編成》業務部経理課が独立し経理部ができる	富山銀行60年史		
	昭和40年代 ～50年代頃	?	【北棟】天井高さを改変する内装改修か	照明設置時期と 平成元年の内装写真	★	
1977	昭和52年		【附属】中庭書庫（CB造）、ATM棟（RC造）増築	固定資産税課税明細書		
1987	昭和62年	8月	《組織編成》外国部ができる	富山銀行60年史		
		11月	「富山の建築百選」に選定される	北日本新聞1987/11/20	★	
			【附属】更衣室棟（S造）増築	固定資産税課税明細書		
1994	平成6年	2月	《組織編成》業務部が営業企画部と営業推進部に分かれる	富山銀行60年史		
1996	平成8年	3月	富山県の主要な近代化遺産として紹介される	富山県近代化遺産調査報告書	★	
1998	平成10年		【北棟】営業室内装改修 【附属】ATM棟増築改修	富山銀行保管図面		☆
2000	平成12年		【附属】新事務所棟（S造）増築	固定資産税課税明細書		
		12月4日	山町筋が重要伝統的建造物群保存地区に選定される	文化庁		
2002	平成14年	2月	《組織編成》業務部が営業企画部と営業推進部に分かれる	富山銀行60年史		
2010	平成22年	3月	「とやまの近代歴史遺産百選」に選定される	富山県教育委員会	★	
		8月	【北棟】銅板屋根修理工事	工事報告書	★	☆
2014	平成26年	12月25日	【北棟】築100年を迎える	富山銀行60年史		
2016	平成28年	8月	富山銀行本店建物を高岡市に無償譲渡の協定締結	富山新聞2016/08/02		
2017	平成29年	1月	富山銀行と高岡市が土地交換契約を結ぶ	市資料		
2019	令和元年	11月	赤レンガ銀行104年で幕 高岡 富山銀本店移転で	富山新聞2019/11/23		
2020	令和2年	7月	【附属】解体撤去工事着手	市資料		
		12月	【附属】解体撤去工事完了	市資料		

表 1-02 旧高岡共立銀行 平面図の変遷

No.	図面①	図面②	図面③
出典	清水建設所蔵	清水建設所蔵	清水建設所蔵
年月	大正 3 (1914) 年 12 月	大正 15 (1926) 年	昭和 13 (1938) 年 5 月
工事名	高岡共立銀行本店 新築工事	高岡銀行本店 増築工事	高岡銀行本店 衛生設備工事
設計	設計：田辺淳吉（清水満之助店） 施工：清水満之助店	設計：大友 弘（清水組） 施工：清水組	設計・施工：清水組
1 階平面図		(木造附属棟の一部撤去)	
2 階平面図			
3 階平面図			
屋上平面図			
備考		① 図面には記載がないが木造下屋が存在。 ② 南棟増築時、地階にボイラー室を増設。	③ 南棟に地階を増設、同時に北棟の金庫室から地階への経路を増設 ④ 実際に重役役員室に便所が設置されたかどうかは不明。

図面④	図面⑤	図面⑥
富山銀行所蔵	富山銀行所蔵	高岡市・平成 30 年度調査報告書
昭和 22 (1947) 年 9 月 *	昭和 39 (1964) 年 10 月 *	平成 10 (1998) 年 ~ 現在
北陸銀行高岡支店 (内装改修工事)	北陸銀行高岡支店 (内装改修工事)	富山銀行本店 営業室内装改修工事
設計・施工: 佐藤工業	設計・施工: 佐藤工業	設計・施工: ウイズホーム
		
* 図面に作成年月なし。建物登記簿記載内容より推定。 ⑤ 間仕切壁の開口部の形状から、この位置が正しいか疑問 (図面不正確か)。 ⑥ 北棟 3 階の平面形状に疑問。屋上塔屋部平面か (時計回りに 90 度回転)。	* 図面に作成年月なし。建物登記簿記載内容より推定。 ⑦ 左に同じ。図面の正確な年代は不明だが、左の図面をトレースしたものであることが分かるため、左より後の時代と推定される。2 階の会議室の一つが「頭取室」となっているため、支店から本店への改修であったことが考えられる。(旧北陸銀行富山支店を改修後、昭和 39 年 11 月に富山産業銀行 (昭和 42 年 8 月に富山銀行に改称) として開業。) ⑧ 左に同じ。	⑨ 昭和 41 年頃に天井シャンデリア照明器具 2 灯設置、昭和 43 年頃に水銀灯照明器具 8 灯設置か。 ⑩ 南棟 3 階「営業推進部」及び「総合会議室」はともに内装を新材でカバーしてある。前者は 2 段階、後者は 1 段階の隠蔽。いずれも年代不明。 ⑪ 南側建物解体時、地階を埋めた。

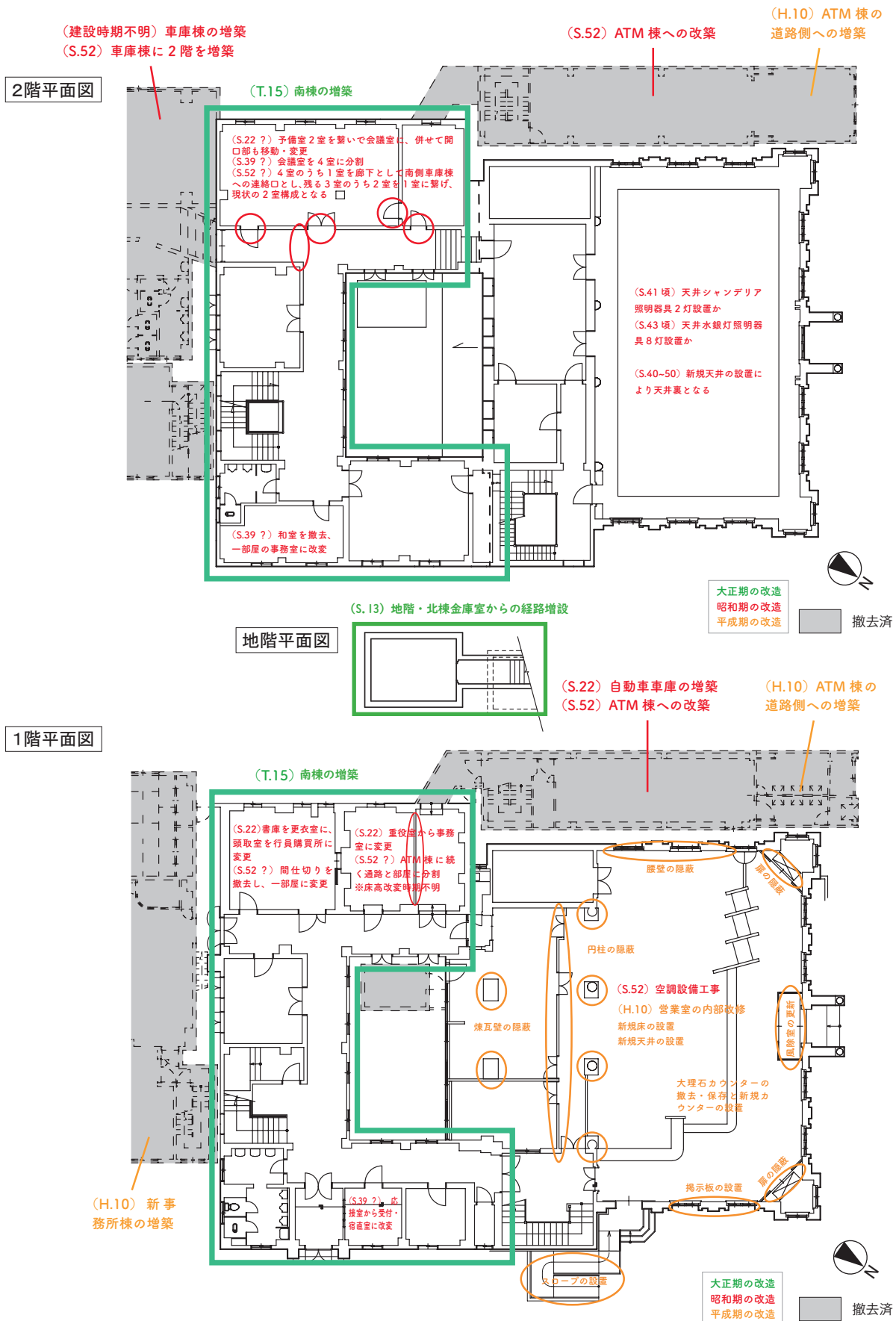
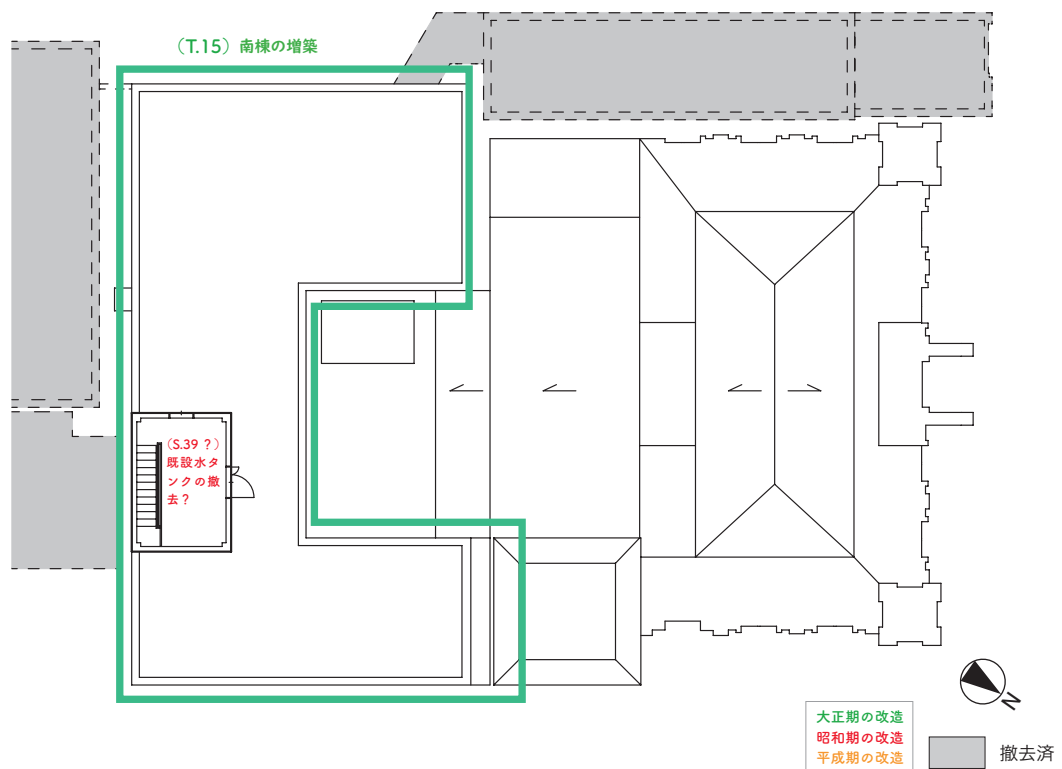


図 1-06 旧高岡共立銀行 主な改造履歴

R 階平面図



3 階平面図

